

公民館の図書室は 学びの入口・みんなの本棚

図書室月報

2024年(令和6年)
7月5日 第734号

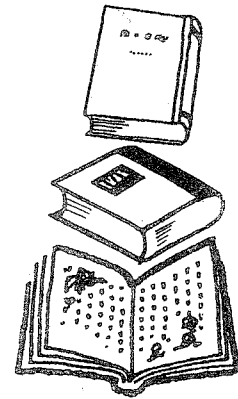
PDF版

国立市中 1-15-1
TEL.042-572-5141
FAX.042-573-0480
国立市公民館

〈2024年2月24日開催 図書室のつどい 参加者の感想〉

「赤松利市^{りいち}」とは一体何者？
“下級国民”とは何のこと？

鳥居 正彦



チラシの中からこちらを凝視するサングラスの強面の男……。その圧倒的な存在感(威圧感)に魅せられて、参加することにした。

登壇した赤松さんは、サングラスをしていないせいか、写真のイメージとは少し違ったが、眼光は鋭い。一言一言絞り出すように静かに語り始めた。

赤松さんの人生。一言で「波乱万丈」と言ってしまうには余りにも重いものだった。

香川の裕福な旧家の生まれ。淡路島の人形浄瑠璃の太夫(語り手)だった曾祖父の影響。植物病理学者(大学教授)の父。パチンコ依存の浪人時代を経て関西大学文学部へ進学。大手サラ金に縁故入社。ハードワークのため燃え尽き症候群になり退職。父親の紹介でゴルフ場のコース管理の仕事を始め、起業(35歳)。社員125名、年収2400万円。しかし、東日本大震災の年、自分の会社を破綻させてしまう……。

『下級国民A』に描かれるのは、赤松さんが仕事を求めている。

「狂乱の復興バブル」といわれた東北へ乗り込んでからの生々しい実体験だ。

赤松さんは、離婚した妻と精神に障害を持つ娘のため月給40万円のうち35万円を仕送りするので、残りは月5万円。生きていくためにギリギリの生活だ。とにかく必死に働き続けなければならぬのだ。

一緒に働く土木作業員、除染作業員たち。様々な人間がうごめく陰鬱な人間模様。妬み、憎悪、反社、恫喝、陰湿ないじめ……。読んでいると息がつまるような閉塞感を感じた。このような劣悪な環境の中で、過酷な肉体労働を続けることがどれほど大変なことだったのだろうか。想像力をかきたてられた。

赤松さんは被災地のリアルな姿を目にしたがら土木作業や住宅除染、水田除染に携わってきた。そこで直面したのが、復興ビジネスの闇ともいえるべき利権が渦巻く世界だった。それは土木ヒエラルキーといわれる差別構造でもあった。元請会社(大手ゼネコン)→一次下請→二次

下請の流れの中で、赤松さんたち二次下請は虫けらのように扱われるのだった。福島においては除染作業員が毛嫌いされている現実もある。また、原発避難民に対する地元住民からの誹謗中傷もあるという。差別と分断の構図がここにもある。

行き詰まった赤松さんは、夜行バスで上京。所持金5000円。風俗店の呼び込みなどで食いつなぎながら「住所不定」の生活を送り、漫画喫茶から作家デビューして現在に至る。

暗い現実を目の当たりにした赤松さんは、私たちに語りかける。今の日本で「下級国民」は特別な存在なのだろうか。格差社会の「今」に順応して生きるすべしかないのではないか。本書は単なるエッセイではなく、復興の裏にある日本の姿を熱く告発するものなのだ。

今回の講座を契機に、貧困と差別をテーマとする赤松作品を読みたいと思う。

赤松利市著『下級国民』(CCCメディアハウス)

ブッククラブから

井戸川射子^{いどがわ いこ}著『ここはとても速い川』を読んで

近藤 あかね

私は今回初めてくにたちブッククラブに参加した。

公民館だよりにブッククラブの紹介記事を見つけ、読み進めると今年度のテーマについて書かれた以下のよう文章があった。

「ひとは出来事に意味を見出そうとします。生まれ、暮らして、死んでゆく、ありふれたわたしたち。喜びがあり、悲しみがあり、希望と絶望がある……。そこに意味は必要なのでしょうか。消えてしまう一人ひとりの話を宝物のように紡いでいく。そんな物語を読んていきたいと思います」

この文章を読んだとき、自分もこのような気持ちで本と対峙したいという思いが湧き上がるのを感じた。

子育て真っ只中にいて、いつの間にか手に取る本は子育て本、健康への実用書、話題の新書などが増えていった。

私の思考の中に、本を通して何か有益な知識を得ねばならぬ、実生活のヒントを本から得たいという打算的な思いがあり、その上で読書をしていった事に気付きハッとした。

私はブッククラブでの活動を通して、純粹な気持ちで本と向き合い、読書の楽しさと共に、その時々自分がどのように感じるかわわっていききたいと思い参加

を決めた。

5月9日開催の第一回目の課題図書は井戸川射子著『ここはとても速い川』であった。

児童養護施設に住む小学五年生の男の子、集^{しゅう}が主人公。集と同じ施設に暮らす年下の親友ひじりとの日常生活が大阪弁の独特なリズムの中で紡がれていく。

その日常は、状況だけ見ると私の目には特異な環境に映り、親と暮らせぬ集への憐憫を抱かせる。

しかし、集にとつての確かにここにある日常を、見たまま、感じたままに描いている文体は読者にそのような感情を抱かせる隙を与えない。

それほど淡々と今を生きている集。

世の中を俯瞰で見て、達観した子どもとさえ見える集が、物語の後半で施設の園長に抱えていたものを一気に爆発させるシーンがある。

社会に対し、大人に対し、親に対しての怒り、抗議、哀しみ……様々な気持ちが次から次へと溢れてくる。

この場面で私は涙が出たが、「生きていく」とは「生」と向き合い続けることだと感じた。

この本は、ノウハウ本のように上手く生きる為のヒントは書かれていない。

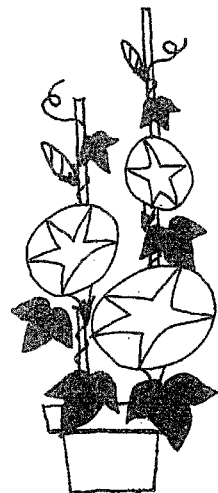
しかし私自身の心の奥にジンワリ響き、ありのまま

の「生」を肯定したいと思える本であった。

講師の山岸郁子先生が、著者の言葉を紹介してくださった。

「大人も子どもも、どの性であっても、誰もが生きづらさを抱えている。でも時には楽しいこと、うれしいことがあつて生きている。それを書きたかった」

今後もブッククラブを通して様々な本との出逢いを楽しみにしている。
(講談社文庫)



くにたちブッククラブ

ーたしかにそこにいた「わたし」のことー

林芙美子『放浪記』(新潮文庫)

※本作の第一部について扱います。

講 師 おだいら まいこ
小平 麻衣子
(慶應義塾大学・日本近代文学)

と き 7月18日(木) 夜7時半～9時半

ところ 公民館 3階講座室

申込先 公民館 ☎042 (572) 5141または下記二次元コードより

*次回は9月12日(木)
太宰治『ヴィヨンの妻』(新潮文庫)です。



*11月、12月のブッククラブの日程が決まりました。

11月14日(木) 夜7時半～9時半

12月12日(木) 夜7時～9時

新着図書から

〈総記〉

図書館員のための「やさしい日本語」

阿部治子 (日本図書館協会)

015

「まちライブラリー」の研究 磯井純充 (みすず書房)

016

サンリオ出版大全 小平麻衣子 (慶應義塾大学出版会)

023

〈哲学 心理学 宗教〉

所有論

鷲田清一 (講談社)

104

〈歴史〉

磯田道史と日本史を語ろう

磯田道史 (文藝春秋)

210

私はさよならを言わなかった

クロディヌ・ヴェグ (吉田書店)

235

暴力とポピュリズムのアメリカ史 中野博文 (岩波書店)

253

〈社会科学〉

日本が知らないウクライナ

ユリヤ・ジャブコ (大学教育出版)

302

デンマークを知るための 70 章 村井誠人 (明石書店)

302

アーレントから読む 矢野久美子 (みすず書房)

311

国境と人類 ジェイムズ・クロフォード (河出書房新社)

312

アイヌもやもや

北原モコットウナシ (303BOOKS)

316

ルビーの一步 ルビー・ブリッジズ (あすなろ書房)

316

基本的人権の事件簿

棟居快行 (有斐閣)

323

再審制度ってなんだ?

村山浩昭 (岩波書店)

327

非正規という働き方と暮らしの実像 森ます美 (旬報社)

366

ケアの倫理

岡野八代 (岩波新書)

367

キミのからだはキミのもの

ルシア・セラノ (ポプラ社)

367

マイステップ

野坂祐子 (誠信書房)

367

未婚じゃなくて、非婚です ホンサムビギョル (左右社)

沖縄ともろさわようこ

源啓美 (不二出版)

367

おろそかにされた死因究明

出河雅彦 (同時代社)

367

コード

中津真美 (金子書房)

369

災害の環境史

瀬戸口明久 (ナカニシヤ出版)

369

〈自然科学〉

文系オトナですが、今から数学を楽しめますか?

mathchannel (笠間書院)

410

森の声、ゴリラの目

山極寿一 (小学館)

469

奄美でハブを 40 年研究してきました。

服部正策 (新潮社)

487

無人島、研究と冒険、半分半分。 川上和人 (東京書籍)

488

在宅緩和ケア医が出会った「最期は自宅」30 の近き方

高橋浩一 (光文社)

490

精神医療の専門性「治す」とは異なるいくつかの試み

近田真美子 (医学書院)

493

〈産業〉

世界の食はどうなるか

イエルク・スヌーク (原書房)

611

〈芸術〉

芸術のわるさ

成相肇 (かたばみ書房)

704

日本の動物絵画史

金子信久 (NHK 出版)

721

世界の美しい染めと織り

巧藝舎 (グラフィック社)

753

〈文学〉

季語を食べる

尾池和夫 (淡交社)

911

錠剤 F

井上荒野 (集英社)

911

ユーカラおとめ

泉ゆたか (講談社)

911

いつかまた、ここで暮らしたら

大崎百紀 (朝日新聞出版)

911

北辰の門

馳星周 (中央公論新)

911

ハンセン病文学全集 1 ～ 10

大岡信 (皓星社)

918

\\ 文学関連講座やります //



作家から見つめる韓国現代文学

詳細は公民館だより 7 月号をご覧ください

講師 小山内 園子 (韓日翻訳者)

第1回 「人の弱さ」を描く……チョ・ナムジュ

〈とき〉7月28日 (日) 昼2時～4時

〈取り上げる作品〉すべてチョ・ナムジュ著 『82 年生まれ、キム・ジョン』 斎藤真理子訳 (筑摩書房)、
『私たちが記したもの』 小山内園子、すんみ 訳 (筑摩書房)、『耳をすませば』 小山内園子訳 (筑摩書房) など

第2回 文学とフェミニズム……カン・ファギル

〈とき〉8月31日 (土) 昼2時～4時

〈取り上げる作品〉すべてカン・ファギル著 『別の人』 小山内園子訳 (エトセトラブックス)、『大丈夫な人』 小山内
園子訳 (白水社)、『大仏ホテルの幽霊』 小山内園子訳 (白水社) など

第3回 韓国ティーンズ小説の魅力……イ・ヒョン、ソン・ウォンピョン他

〈とき〉9月28日 (土) 昼2時～4時

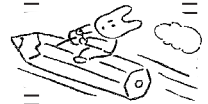
〈取り上げる作品〉『ペイント』 イ・ヒョン著、小山内園子訳 (イースト・プレス)、『アーモンド』 ソン・ウォンピョン著、
矢島暁子訳 (祥伝社)、『ミカンの味』 チョ・ナムジュ著、矢島暁子訳 (朝日新聞出版)

第4回 絶望から希望を探す韓国文学……チョン・セラン

〈とき〉10月26日 (土) 昼2時～4時

〈取り上げる作品〉すべてチョン・セラン著 『屋上で会いましょう』 すんみ訳 (亜紀書房)、『フィフティ・ピープル』
斎藤真理子訳 (亜紀書房)

講座参考図書



〈女性の生きかたを考える講座〉 女性のライフデザイン

(講師 堀本麻由子 ほか)

・なぜ男女の賃金に格差があるのか

― 女性の生き方の経済学

クラウディア・ゴールドデイン (慶應義塾大学出版会)

・『女工哀史』を再考する

― 失われた女性の声を求めて

サンドラ・シヤール (京都大学学術出版会)

・女性のいない民主主義 前田健太郎 (岩波書店)

シルバー学習室

(講師 松本一郎 ほか)



・モデルの発見 松本キミ子 (仮説社)

・三原色で描く四季の草花 松本キミ子 (日貿出版社)

・続ひろびろ三原色 松本キミ子 (ほるぷ出版)

・形とくらしの雑草図鑑 見分ける、身近な280種

岩瀬徹 (全国農村教育協会)

・くにたち緑の交響楽

国立植物ガイドブック制作委員会 (国立市教育委員会)

〈私の本棚から 第4回〉

ローリー・コルウィン著

『わたしの 陽気なキッチン』

鍛冶 勝



読売巨人軍、長嶋茂雄・終身名誉監督の奥さま、故長嶋重希子夫人は、アメリカで教育を受けられました。現地の高校、大学を卒業された夫人は、習い覚えた「アメリカの家庭料理」を、一冊の料理書にまとめ、生前、出版されています『わたしのアメリカ家庭料理』(文化出版局)。

一九六〇年代前半のアメリカで、一般家庭にホームステイされた重希子夫人。滞在先のホスト・マザーに教わった、旧き良きアメリカの伝統家庭料理は、どれも、ごちそうの名に恥じない一品です。

「アメリカに、おいしいものはない。あるのはハンバーガーだけ」―そんな常識をくつがえした夫人の功績は、永久に不滅です。

ローリー・コルウィンも、金字塔を立てた一人です。一九七〇年代、第一回の本欄で紹介した、高級誌『ザ・ニューヨークー』に、ショート・ストーリー (短篇) を発表し、若くして才能を認められました。

五冊の長編、三冊の短篇集を発表するかわら、料理上手の彼女は、満を持して、自慢の料理を紹介する、クッキングブックを出版します。これが当たり。たちまちニューヨーク・タイムズのベストセラーリストに、名を連ねます。

『わたしの陽気なキッチン』は、全米で今も売られています (原題 HOME COOKING)。日本の翻訳書は新刊で手に入りませんが、ロングセラーとなったアメリカの原著は、ペ

ーパーバックで入手可能。もちろん、全米の古書店で普通に見かけます。

特徴は、写真がないこと。小説家らしく、文章一つで、家庭料理を紹介しています。一枚の写真もありません。

Alphabetの力だけで、全レシピと料理エッセイを、つづっています。なのにベストセラー！出版するのに冒険がいったことでしょうか、そこは、潜在読者世界一の英語圏。マイナー・ランゲージの日本語と、マーケットの規模がちがいます。

グルメ大国・日本には、フレンチ、イタリアン、和食、中国、韓国料理と、大勢の料理研究家がいらして、TVに出演されて本を出していますが、アメリカの家庭料理をあ

つかう方は、まだいないようです。わたしにやる気があれば、この本のレシピを研究し、本場アメリカの料理学校なり、レストランの片隅なりと研さんを積み、時間をかけても、アメリカ家庭料理研究家として、デビューを考えていたかもしれません。

著者オススメの、肩ロースを使ったボットローストでお客様をもてなしたところ、みなさん無口で、自宅が静まり返りました。お一人残らず食べるのにいそがしく、お皿

の上で高鳴るフォークとナイフのほかに聴こえたものといえば、窓の外ですだく虫の音だけでした。まっ黒なブラック・ケーキをデザートに供しましたら、「おまえに作れるはずがない。レシピを公開しろ」と、迫られた次第です。

小説と料理。二兎を追い、どちらも成功させたコルウィンの腕。

(晶文社)

お知らせ

8月6日(火)の午前中、サーバーメンテナンスのため図書館システムが利用できません。返却・貸出対応に、少々お時間をいただきます。ご迷惑をおかけしますが、ご了承ください。

